

# Japanese Composition Teaching and the Effect of Correction

Yukiko Muramatsu

TUT has offered a subject on Japanese composition for junior students since in 1995, and we have nine classes from A to I in 1997. The purpose of this paper is to analyze the effects of correction by counting the number of mistakes in the compositions which students wrote. The investigation was conducted on forty-six students who had enrolled in class E.

The findings of this investigation are as follows:

- (1) After the first correction, a little more than 30% of students in this class decreased the number of mistakes in grammar and *kanji*.
- (2) It seems that students who make many mistakes have difficulty in obtaining a noticeable result from the first correction.

# 工学部における日本語作文教育と添削指導効果

——添削箇所数による分析——

村 松 由起子

## 1. はじめに

本学では、1995年度から学部3年次を対象とした作文指導科目「日本語法」を開設し、本年度で3年目になる。本学は3学期制を採用しているが、「日本語法」は1997年度現在、1学期2クラス、2学期5クラス、3学期2クラスの年間計9クラスを開講しており、筆者は1996年度、1997年度の2学期に各1クラスを担当している。この科目は日本語の作文を演習しながら文章作成の技法を身につけることを目標としており、学生は多数の作文課題に取り組まなければならない。また、教官側も通常は添削等に追われているのが現状である。そのため、学生、教官ともに作文指導の効果を具体的に実感することは難しい状況にある。

本稿は、この作文指導の効果を目に見える形で示すために行った調査及び分析の結果を報告するものであり、調査は、1997年度2学期に筆者が担当した「日本語法」Eクラスを受講者を対象に、作文の添削箇所数の変化を調べる方法で行った。

## 2. 研究の目的

日本語法Eのクラスでは初回から第5講までは毎回1つずつ作文の課題を与え、学生に提出させた。<sup>1)</sup>提出物は、添削後返却しているが、添削内容がその後の作文にどの程度反映されているかについては、単に添削を繰り返しているだけではなかなか把握しにくい。

そこで、今回、日本語法Eのクラスについて、その実態を調査すべく、添削指導の効果を添削箇所数の変化から分析することを試みた。そして、さらに、学生自身が添削指導効果をどのくらい実感しているかについても第5講時にアンケートを行い、学生の意識と実際に現れた効果との差を明らかにした。

### 3. 初回授業アンケート結果

#### 3-1 アンケートの目的

添削指導を始めるに当たり、学生自身が自分の文章力をどのように捉えているかを知る目的でアンケートを行った。このアンケート結果は、以後添削指導を行う際にどのような解説を付けたら学生が理解しやすいかを判断したり、講義の補助プリントを作成する上で参考になった。

#### 3-2 アンケートの集計

初回の授業出席者 43名に、現在の作文力及び文章を書く際に感じている問題点についてアンケート形式で質問してみた。

以下はその結果である。

##### 1 漢字力はあると思いますか。

- |              |     |            |     |
|--------------|-----|------------|-----|
| 1) まったく自信がない | 12名 | 2) 少し自信がない | 16名 |
| 3) 普通        | 15名 | 4) 自信がある   | 0名  |

##### 2 語彙力はあると思いますか。

- |              |     |            |     |
|--------------|-----|------------|-----|
| 1) まったく自信がない | 11名 | 2) 少し自信がない | 21名 |
| 3) 普通        | 10名 | 4) 自信がある   | 1名  |

##### 3 文法力はあると思いますか。

- |              |     |            |     |
|--------------|-----|------------|-----|
| 1) まったく自信がない | 13名 | 2) 少し自信がない | 21名 |
| 3) 普通        | 7名  | 4) 自信がある   | 2名  |

##### 4 表現力はあると思いますか。

- |              |     |            |     |
|--------------|-----|------------|-----|
| 1) まったく自信がない | 13名 | 2) 少し自信がない | 19名 |
| 3) 普通        | 9名  | 4) 自信がある   | 2名  |

##### 5 今の自分の文章力に満足していますか。

- |           |     |              |     |
|-----------|-----|--------------|-----|
| 1) していない  | 22名 | 2) 少し足りないと思う | 17名 |
| 3) まあまあ満足 | 4名  | 4) 満足        | 0名  |

##### 6 感想文を書くとき、どんな問題点を感じますか。(複数回答可)

- |   |     |
|---|-----|
| 1) 特に問題は感じない  | 1名  |
| 2) 何について感想を書いたらよいかかわからないことがある   | 22名 |
| 3) 感想というよりも、内容の要約になってしまう  | 21名 |
| 4) 字数が多くなると、文章がまとまらなくなってしまう   | 25名 |
| 5) その他 (言葉が出てこない・話の展開の仕方がわからない・時間がかかりすぎる・感想がなく客観的になってしまう・作文の順序がわからない・文章に起承転結がない・行き当たりばったりの文章になる・先に進むと口調が変わってしまう・途中で何を書いているのかわからなくなる・感想がないときがある) |     |

- 7 レポート・小論文を書くとき、どんな問題点を感じますか。(複数回答可)
- |   |     |
|---|-----|
| 1) 特に問題は感じない  | 2名  |
| 2) テーマが決められない   | 10名 |
| 3) 資料の集め方がわからない   | 6名  |
| 4) 書くための形式がわからない  | 13名 |
| 5) 文章をうまくまとめられない  | 29名 |
| 6) いいレポートが書けない(評価が低い)   | 19名 |
| 7) その他 (自分の考えをうまく表現できない・文章を書くことが苦手というよりは嫌い・うまく表現できず時間がかかる・文章がねじ曲がってしまう・目標の枚数に達しない・知っている漢字が少ないのでうまく表現できない) |     |
- 8 今までに文章を書く訓練をしたことがありますか。
- |       |   |
|-------|---|
| 1) ない | 22名                                       |
| 2) ある | 21名 (小学校7名 中学校3名 高専5名 大学8名) <sup>2)</sup> |

### 3-3 アンケートの結果から

このアンケートから、かなりの学生が自分の文章力に自信がないことがわかる。これは、多くの学生が高専・大学レベルで文章を書く訓練をしていないこととも関連があるように思われる。高等教育の場で、自分の文章がどのように評価されるのか判断できないために、自信が持てない学生が多いのではなかろうか。アンケートで「まったく自信がない」「少し自信がない」と答えた学生の作文を読んでみても、質的にはさほど問題のない作品も少なくない。また、アンケートでは上記項目以外に受講目的、要望、抱負も書いてもらったが、受講目的として「いい文章とは何かを知る」と答えた学生が10名おり、いい文章を書けるようになりたいが、どのような文章を手本にしてよいのかわからないようである。

アンケート結果で意外であったのは、文法力に自信のない者が多い点である。実際の添削でも助詞や接続詞に関する誤りが多かったので、添削ではこの点を考慮し、文法の誤りにはできるだけ簡単な解説を付けることにした。

## 4. 授業の進め方

Eクラスでは、山内(1994)の「工学部学生による作文集」<sup>3)</sup>に収められている作文演習課題に従って、文章を書く練習を行った。収録演習は全部で10課題あるが、Eクラスではこのうち8課題を扱った。

授業は、前半は筆者が作成した練習問題、講義、課題の説明を行い、後半は各自で課題に取り組むという方法で進めた。作文は次週までに提出することとし、提出物は添削後翌週の授業で返却した。作文には添削時に「内容」「構成」「文法」「表記」の各項目で評価を付け、どの項目に問題があるのかが学生にわかるようにした。

## 5. 添削結果

本稿では、全8課題中、初回から第4講までの以下の課題について、各課題ごとに添削箇所数を調べてみた。

第1講	自己紹介文	350字
第2講	技科大生になって	750字
第3講	最近のできごと	1250字
第4講	風景のスケッチ	400～800字

調査した結果は表1の通りである。

内容、構成に関する添削箇所数を数として把握するのは難しいことから、今回の調査では文法・表現に関する箇所と漢字・語彙に関する箇所に限定してその数を調べた。具体的に述べると、文法・表現では、文法の誤り、話し言葉の使用、ねじれ文、文と文の接続<sup>4)</sup>などを添削し、漢字・語彙では、誤字、脱字、カタカナ・ひらがな表記の誤り、語彙の使い方の誤りなどを添削した。また、同一課題に同じ誤りが複数あっても1箇所として数えたが、異なる課題での同じ誤りはそれぞれ1箇所として数えた。

なお、表1左端の1～46のナンバーは、便宜上学生につけた番号であり、(留)はその学生が留学生であることを示している。

表1

受講者数 46名 (内留学生は7名)

上段：文法・表現に関する添削箇所数

下段：漢字・語彙に関する添削箇所数

	課題1	課題2	課題3	課題4	添削箇所総数
1	1	1	0	0	2
	0	2	1	0	3
2	1	4	4	2	11
	0	0	0	0	0
3 (留)	4	4	14	10	32
	0	2	3	5	10
4	1	1	0	1	3
	1	2	3	0	6
5	1	5	1	2	9
	0	0	0	0	0
6	1	0	5	1	7
	0	1	0	0	1

7	0	0	0	1	1
	0	1	3	4	8
8	1	0	0	0	1
	2	3	0	0	5
9	1	1	0	1	3
	1	0	2	0	3
10	0	2	5	0	7
	0	0	0	0	0
11	2	3	7	0	12
	0	1	0	0	1
12	0	3	1	0	4
	0	1	0	0	1
13	2	0	6	1	9
	0	1	0	0	1
14	2	5	7	3	17
	0	2	2	0	4
15	3	0	0	1	4
	1	1	1	1	4
16	0	5	10	1	16
	1	1	7	1	10
17	1	3	0	0	4
	0	0	0	0	0
18	1	3	7	1	12
	0	3	2	2	7
19	1	2	2	0	5
	0	1	0	0	1
20	3	6	5	1	15
	1	0	2	0	3
21	1	5	15	1	22
	0	1	0	0	1
22	1	8	3	1	13
	4	2	3	1	10
23	2	1	3	7	13
	0	0	3	3	6
24	0	2	1	3	6
	1	0	1	0	2
25	1	1	3	0	5
	0	2	0	0	2

工学部における日本語作文教育と添削指導効果

26	0	1	0	1	2
	0	1	1	1	3
27	3	5	5	4	17
	3	0	2	1	6
28	2	4	0	1	7
	0	0	3	0	3
29	2	8	4	1	15
	0	3	0	1	4
30	1	1	0	0	2
	0	0	1	0	1
31	0	0	2	1	3
	0	1	4	12	17
32	0	0	2	2	4
	0	6	3	2	11
33	1	2	5	1	9
	1	3	6	1	11
34	0	1	2	1	4
	0	3	2	0	5
35	1	0	0	1	2
	1	0	2	2	5
36	0	1	0	1	2
	0	0	2	0	2
37	1	3	2	0	6
	0	1	0	1	2
38	0	2	4	1	7
	0	0	1	2	3
39	1	2	1	1	5
	0	0	0	1	1
40	1	0	0	0	1
	0	0	0	0	0
41 (留)	5	7	21	9	42
	2	4	0	0	6
42 (留)	5	20	27	9	61
	0	0	3	0	3
43 (留)	3	14	16	5	38
	1	2	4	0	7
44 (留)	3	9	17	9	38
	0	3	2	2	7

45 (留)	6	17	34	9	66
	3	4	9	6	22
46 (留)	9	17	29	12	67
	4	2	4	4	14

## 6. 分析

本稿では、課題2と課題3の添削箇所数の増減を比較してみた。課題2は、課題1の返却前に作文を書いているため、課題2に課題1の添削内容を反映させることは無理である。課題2と課題3を比較の対象に選んだのは、課題3を書く時には既に初回の課題が返却されており、添削内容を反映させられること、課題3では字数が増えているが、それにもかかわらず添削箇所が減っている場合は、添削の効果が現れていると思われること、からである。

課題4については添削箇所数は調べてみたが、課題の字数が400～800と幅があり、添削箇所数を単純に比較することができないため今回は比較の対象から外した。

なお、効果があまり現れていないケースと効果が現れたケースを比較するため、添削箇所数が増加した人数と減少した人数を添削箇所総数別に調べることにした。前者のケースでは、課題3の字数が課題2の約1.7倍に増えていることを考慮し、字数に比例して添削箇所数が1.7倍以上に増加した者の人数を、後者のケースでは、単純に添削箇所数が減少した者の人数を調べた。

以下、文法・表現に関する添削と漢字・語彙に関する添削に分けて分析していきたい。

まず、文法・表現に関する添削についてであるが、結果は表2の通りである。

表2

文法・表現に関する添削

添削箇所総数	人数	添削箇所が増えた者	添削箇所が減った者
1～5	19名	4名 (21.1%)	9名 (47.4%)
6～10	9名	5名 (55.6%)	4名 (44.4%)
11～15	7名	3名 (42.9%)	3名 (42.9%)
16～20	3名	1名 (33.3%)	0名 (0%)
21～25	1名	1名 (100%)	0名 (0%)
26～30	0名	0名 (0%)	0名 (0%)
31以上	7名 <sup>5)</sup>	5名 (71.4%)	0名 (0%)
計	46名	19名	16名



添削箇所が増加したケースをみると、添削箇所総数が1～5の者では該当者が21.1%と最も少ないのに対し、31以上の者では71.4%と最も多かった。ただし、6～10の者も55.6%が増加しているので、添削箇所総数が少なければ該当者が少ないとは単純に言いきれない。

一方、添削箇所が減少したケースをみると、これは添削箇所総数が15以下の者とそれ以上のもので、明らかな違いがある。15以下の者は35名いるが、このうち16名の添削箇所数が減少しているのに対し、16以上の者11名中には該当する者がいない。初回の添削効果が最も大きかったのは1～5の者で、この19名中には課題2、課題3のいずれも添削箇所0だった者が5名いるので、この5名を除くと、14名中9名、すなわち64.3%の者が減少していることになる。逆に添削箇所総数が多い者は、初回の添削では、その効果が現れにくいことがわかった。

次に、漢字・語彙に関する添削についてであるが、結果は表3の通りである。

表3

## 漢字・語彙に関する添削

添削箇所総数	人数	添削箇所が増えた者	添削箇所が減った者
0	5名	/	/
1	8名	/	6名 (75%)
2	4名	1名 (25%)	2名 (50%)
3	7名	4名 (57.1%)	1名 (14.3%)
4	3名	0名 (0%)	1名 (33.3%)
5	3名	1名 (33.3%)	2名 (66.7%)
6	4名	2名 (50%)	1名 (25%)
7	3名	1名 (33.3%)	2名 (66.7%)
8	1名	1名 (100%)	0名 (0%)
10	3名	1名 (33.3%)	0名 (0%)
11	2名	1名 (50%)	1名 (50%)
14	1名	1名 (100%)	0名 (0%)
17	1名	1名 (100%)	0名 (0%)
22	1名	1名 (100%)	0名 (0%)
計	46名	15名	16名

漢字・語彙では添削箇所数0~5の者が30名おり、全体的に見て、文法・表現よりも添削箇所の少ない者が多いことがわかった。そのため、表2では添削箇所総数5ごとの人数を示したが、表3では1ごとの人数を示すことにした。

増加した者を見ると、添削箇所総数が0~5の者では30名中6名で20%、6~10の者では11名中5名で45.5%、11以上の者<sup>6)</sup>では5名中4名で80%の者が該当し、添削箇所総数が多いほど増加する者の割合が増えている。一方、減少した者を見ると、添削箇所総数7と8を境に該当者が少なくなることがわかった。文法・表現と同様に、添削箇所総数が多いと初回の添削ではあまり効果が期待できないと考えられる。

## 7. 学生の誤用例

では、実際にどのような誤用があったのか、参考までに具体例をいくつか示しておくことにする。文法・表記に関する誤りとしては、文法に関する事項が385か所、話し言葉の使用が91か所あり、特に文法の誤りが多いことがわかる。<sup>7)</sup>以下、日本人学生の誤用例をいくつか紹介する。

- 1) 私が技科大生になり、日々の生活には多少の変化があった。
- 2) 私がやってみようと思っていたこと
- 3) 英語をしっかりと取り組みたい
- 4) 技科大では通用していかないことがつくづく思った
- 5) いろんな物が置いていた

漢字・語彙に関しては、添削内容も調べてみたが、その結果、添削後も同じ誤字を繰り返した者が1名、添削後誤字を避けるためにひらがなを用いるようになった者が3名いることがわかった。また、複数の者が間違えた漢字には、講義(3名)、編入(3名)、一緒(2名)、初・始(5名)、分野(2名)、地元(3名)、友達(2名)があった。誤字をタイプ別に見ると、同音異形が69ヶ所、まったく別の漢字が22ヶ所、偏や旁などの字形の誤りが25ヶ所、送りながが15ヶ所あり、同音異形による誤りの多さが目立った。

## 8. おわりにかえて

課題4の返却時に再び学生にアンケートを行い、返却後の作文取り扱いについて質問してみた。その結果、返却後いつも見直しをしている者が23名、だいたいしている者が20名、していない者が2名で、ほとんどの学生が見直しをしていると答えた。また、添削された点を以後気をつけているかどうかについては、気をつけている者が16名、少し気をつけている者が29名、気をつけない者が0名、添削は効果があると思うかについては、「ある」が27名、「少しはある」が18名、「あるとは思わない」が0名で、学生自身は添削の効果を期待し、認めているようである。

今回の調査結果を見る限り、添削の効果が明らかに現れている受講者は、文法・表現に関する事項、漢字・語彙に関する事項共に3割強程度であり、学生の「効果がある」という意識と実際に数字として現れる効果には差があることがわかる。

最後に、本稿では、あくまで、初回の添削効果を分析しただけであり、添削効果を総合的に検討するためには、添削を繰り返す行う効果や効果の持続性などの分析も必要であることを付記しておく。

注

- 1) 第1講から第4講までは本文「5. 添削結果」参照。第5講：恩師への手紙，第6講：文章視写（1600字），第7講：読書感想文（4000字），第8講・第9講：自由課題（2000字）
- 2) 計23名になるのは「小学校と中学校」と答えた者が2名いたためである。
- 3) 山内啓介編集執筆。平成5年度文部省大学教育方法等改善経費によるプロジェクト研究「一般基礎科目における工学部学生及び編入学生の日本語学力向上と充実に関する調査研究」によって刊行された。
- 4) 文と文の接続としては、不適切な接続詞及び接続助詞の使用，不必要に1文を長くしているものを添削した。
- 5) この7名は留学生である。
- 6) 添削箇所総数11以上の者を日本人，留学生別にみると，11，17が日本人，14，22が留学生である。
- 7) 留学生の誤用を含んだ数である。